

The Wire への追悼記事（全文）；

Sawako Kato (1978-2024)

by Jez Riley French

誰もいないキャンプ場の背の高い草むらで、私と sawako は立ち止まって耳を傾けていた。その後、金属の看板が反響するのを聞くために丘を登った。セミの鳴き声が響いていた。

sawako はサウンド スカルプターという呼び方を好み、その作品は電子音楽やコンピューター音楽、フィールドレコーディング、パフォーマンス、インスタレーションにまで及んでいた。友人や協力者として寛大で、アーティストとして多面的な彼女は、広大なステージに複雑なサウンドを配置した。

若い頃にピアノと能楽を学び、20 代のアメリカ在住中にインタラクティブ テレコミュニケーションの修士号を取得した。「私の専門は、さまざまなデータや信号の視覚化と可聴化でした。音+映像+α（センサー、自然現象など）の相互作用」

2000 年代初頭、エレクトロニクス、アブストラクトフィールドレコーディング、声、小型楽器との自然な相互作用を組み合わせたパフォーマンスを米国とヨーロッパで行ったことで、彼女は重要かつ尊敬されるアーティストとしての地位を確立しました。2010 年に彼女はさらなる研究のため、そして日本でも探究的なサウンドと音楽文化の中心的役割を果たすために日本に戻りました。彼女の芸術的探求への献身は、それが彼女を導く場所を楽しむことに一致していました。

「人々が音楽に出会ったときに起こる化学変化は本当に興味深いです。私は人々、物、場所を結びつけるプロジェクトを作りたいと思っています。個人的には、音だけでなく他の波や周波数に興味があります。電磁波、太陽光、赤外線、（人間には）聞こえない音、将来の人間の感覚と「耳」は、私たちが現在できない周波数をキャッチできるかもしれません。」

sawako にとって、自分の仕事を追求するだけでは十分ではありませんでした。彼女は、イベントの企画、ツアーの計画や翻訳の手伝い、横浜のフェリス女学院大学の女子学生へのメディアアート、電子音楽、コーディングの指導、東京の自由大学での DIY 音楽の指導など他の人の活動を手伝ってきました。そこで彼女は、教えることでパフォーマーとしての自分の癖を理解することができたと述べています。「ミュージシャンは経験があるので、次にどんな音が来るか、その人がどんな音楽を作ってきたか、歴史がわかりますが、初心者にはそれがないので、良さがにじみ出るのです。」

イベントの前日や友人に送るために手作りでパッケージングされた CD-R のほか、彼女の bandcamp や TinyTinyPress レーベルでのリリース、コンピレーションへの出演、リミックス、即興セッション、12k、and/OAR、Winds Measure、Autumn Records、Anticipate、Cherry Music などのレーベルでの活動、彫刻されたガラスなどがありました。坂本龍一、ASUNA、o.blaat、Kyoka、秋山徹次、杉本拓、テイラー・デュプリー、コーリー・フラワー、荒井佑実、Minamo、私、その他大勢の人と幅広くコラボレーションしましたが、しばしば予想を裏切りました。

「彼女は私を、彼女の初のソロアルバム収録のために演奏するよう招いてくれました。ゲストも多数いて、それぞれが録音機を持っていました。sawako は彼らに、好きな場所で演奏を録音するように頼みました。私の記憶では、ほとんどの人が外に出て、電車が通り過ぎる音を録音したり、ただビーチを楽しんだりしていました。」 - 中村としまる

sawako は、デザインスペース gift_ でも定期的に演奏していました。gift_ のアプローチには、彼女と似たテーマ、つまり共同体性や、さまざまなプロセスを使ってアイデアを伝えるというテーマが含まれていました。gift_ の後藤寿和と池田史子は、友人である sawako について、「私たちの活動を最も理解してくれた最も大切な人の一人だったと言っても過言ではありません。彼女が残してくれた音、声、言葉を、私たちはこれからも聴き続けていきたいと思っています」と語っています。

説明するのは難しいことですが、彼女の最もメロディアスな作品でさえ、音楽の中や周囲に複数の相互接続されたレイヤーがあります。おそらく、それを理解するには、アーティストとしての彼女の活動すべてについてもっと知る必要があるでしょう。彼女の手の中ですべてが流動化するのを聞くために。

「私が演奏を始めたとき、彼女の音楽の道はインスピレーションの源でした。彼女の音楽を聴いて多くのことを学びました。彼女のユーモア、そして 2000 年から 2010 年という決して楽ではなかった時期に、実験音楽を演奏していた女性たちの間で感じたとても大切な姉妹のような絆が思い出されます。彼女の音楽はろうそくです。」 - フェリシア・アトキンソン



Sawako & Felicia, 2009.03, NYC

「ほとんどのアーティストには、単純なものと複雑なもの、恣意的なものと選択されたもの、ランダムなものと計画されたものを理解する力がありません。しかし、彼女にはそれがありました。私は一瞬たりとも天才という言葉を使うことをためらいませんでした。」 - ケネス・カーシュナー

彼女の音楽は非常に繊細で、交友関係は非常に広範でした。今でも、彼女についてすべてを知ることは非常に難しいと思います。 - 鈴木英倫子

フランス・ジョバンは最近、量子物理学を含むプロジェクトで sawako と取り組んでいました。下記は、Sawako に送った「喪失と類似点」についてのテキストに対する sawako からの返信です。

「始まりも終わりもない、ただ一点、今ここ...結合した世界は同じであり、両方が一緒にある。 日本語の文法では、主語を飛ばすことができます。 そのため、あなたと私、これとあれ、こことあそこの境界が溶けて曖昧になることがあります。」 (2023)

sawako は、踏み込みすぎずに多作でした。映画、ファッションショー、コマーシャルの音楽を手掛け、庭園や建物にマルチチャンネルのインスタレーションを制作し、明快さと脆さの間を行き来するパフォーマンスを行い、小文字の電子音楽の高く評価されたアルバムをリリースし、サウンドスケープを作り上げましたが、sawako が唯一できなかったのは、芸術がしばしば要求する硬いエッジで自分を押し出すことでした。その代わりに、彼女は自分の仕事に信頼を置き、他の人のための場所を作り、自分の知識を共有した。それが彼女の本質だった。

2月に彼女は東京でイベントに出演することになっていた。代わりに彼女の音楽はステージ上で彼女抜きで演奏された。繊細さで知られているため、ほとんどの人がそれは意図的だと思った。数週間後、彼女は彼岸への境界を越えていった。

- ジェズ・ライリー・フレンチ

以下は、The Wire の記事をまとめている間に、彼女の友人から送られてきたコメントの一部です。いくつかは短縮形で掲載され、その他は単にスペースがなかっただけです。

中村としまる

Sawako は大学を卒業し、ニューヨーク大学でさらに勉強するために日本を離れることになった。私たちは一緒に音楽を演奏し、杉本拓や秋山徹次と一緒に日本で短いツアーをしたこともあった。その時期に、彼女は一度私にインタビューしたことがあり、一度は十分ではないように思えたので、インタビューを続けるために別のカフェに行った。私の記憶が正しければ、それは彼女の学士論文のためだった。それから彼女は私を彼女の初のソロ CD アルバムで演奏しないかと誘ってくれた。私は江ノ島/鎌倉の近くの稲村ヶ崎にある小さなアートギャラリーに行った。そこは海岸に面していて、ギャラリーのすぐ外には江ノ電の線路があった。電車は大きさから言えばほとんど路面電車のようなだったが、他の交通と線路を共有していなかった。とにかく、私がそこに着いたとき、彼女が楽器を持っているのを見かけなかった。その代わりに、DAT、MD、カセットテープなど、さまざまな手持ちレコーダーを持ったゲス

トがかなりいた。よくわからないが、彼女が彼らにそれらを提供していたのかもしれない。私は入力のないミキシングボードでソロ即興セットを演奏し、sawako はゲストに好きな場所から私の演奏を録音するように言った。また、彼らはレコーダーを手持って歩き回るように勧められた。私の記憶では、私が演奏している部屋に残っていたのはほんのわずかで、ほとんどの人はギャラリーの外に出ていった。中には窓越しに私の音が聞こえるくらい近くにいた人もいたかもしれないが、私の音楽の音が聞こえないくらい遠くにいた人が多かったと思う。電車の通過音を録音している人もいたし、ただビーチを楽しんでいる人もいた。とてもユニークな体験だった。誰かのソロアルバムに招待されて、部屋で一人で演奏し、本当に録音されているのかどうかよくわからなかった...でも、そう、私は周囲のさまざまな環境音とともに、その録音者たち全員によって共同で録音されたのだ。sawako はスタジオでそれらをミックスして編集し、アルバム「Yours Grey」* を制作した。

* Yours Grey : 2003 収録、2004 リリース

フランス・ジョバン

私たちは sawako の死を悼みます。彼女の優しい精神と伝染性のある笑顔は、彼女を知るすべての人の人生を明るく照らしました。彼女の音楽は、いつも遊び心があり、気まぐれで、彼女が周囲の人々にもたらした喜びを反映していました。私たちが初めて出会ったのは、彼女が 2000 年代初頭、彼女がニューヨークで働いていたときでした。

彼女はニューヨークで勉強していましたが、彼女の存在は私たちのサークル内に暖かさと友情の感覚をもたらしました。彼女はこの世を去りましたが、彼女の喜びに満ちた精神と彼女の音楽のメロディーの思い出は永遠に私たちの心の中に響き、彼女が私たち全員と共有してくれた美しさの証です。私たちは 2023 年 6 月に、ジェイフン・バンがキュレーションしたプロジェクトである量子物理学に関連する新しい冒険と一緒に乗り出しました。私たちの最後の会話を皆さんと共有すること以上に、彼女の思い出を称える良い方法は思いつきません。

私は自分のアルバム「死は完璧であり、他はすべて相対的である」のために書いた次のようなテキストを彼女に送りました。

○「死は完璧であり、他はすべて相対的である」

この 2 年間、私は死という珍しい仲間との付き合いを維持してきました。ミカ・ヴァイニオと私の家族 3 人を失ったことは、私に深い影響を与え、人生、死、そしてその間のすべてについて長い間考えるきっかけとなりました。それと並行して、科学哲学を勉強しているときに、影の光子に出会いました。

「有形の光子は、機器を使って見たり検出したりできる光子ですが、影の光子は無形（目に見えない）で、有形の光子への干渉効果を通して間接的にしか検出できません。有形の光子と影の光子の間に本質的な違いはありません。各光子は、1 つの宇宙では有形ですが、他のすべての並行宇宙では無形です。光子は光速で移動し、鏡で跳ね返り、レンズで屈折し、不透明な障壁や間違っただけの色のフィルターで止められます。それでも、最も感度の高い検出器でも反応しません。宇宙において影の光子が影響を与えることが観察できる唯一のものは、それが伴う実体のある光子です。これが干渉現象です。影の光子は、この現象と、それを観察する影の奇妙なパターンがなければ、まったく気づかれないでしょう。したがって、影の光子の沸き立つ、途方もなく複雑な隠れた世界の存在が推測されました。」*

* 現実の構造、デイビッド・ドイチュ、ペンギン・プレス、1997 年

私は影の光子と死を類似点として描きました。干渉現象、並行宇宙、そして影の光子が伴う実体のある光子にどのように影響するかは、私の意見では、死という未知の宇宙と、私たち、つまり実体のある人

間がどのように影響を受けるかという類似点を示しています。この探求により、私は自分の人生における混沌をより喜んで受け入れ、死は完璧であり、他のすべては相対的であると結論付けるようになりました。

Osawako の回答：

フランスさん、文章をありがとう！あなたが「死」「空」「完全」などについて、もっと深くどう感じ、考えているのか知りたいです。あなたの文章は私に「虚と実」「陰と陽」といったアジアの概念や、鏡や水を使った昔の慣習を思い出させます。死は生であり、生は死です。始まりはなく、終わりはありません。（輪廻転生のような円の概念ではなく、ただ一点、今ここです just one point – now here. 一点、一次元は多次元のすべての層を通過できます。） 2023 年の普通の人間は、他の多宇宙を見たり感じたりすることはないかもしれませんが、結合した世界は同じであり、両方とも一緒に今ここにあります。

「あの世（＝死後の世界、彼岸） とこの世（＝この世、私の世界、此岸）」「あわいの世界（その中間の世界）」

日本語の文法では、主語を省略することができます。だから、時々、あなたと私、これとあれ、こことあそこなどの境界が溶けて曖昧になるんです。能楽のセリフがいい例です。（sawako/ 2023 年 8 月 16 日）

鈴木英倫子

私と sawako は東京のエレクトロニックサウンドシーンで友達で、東京の gift_lab と Ftarri という 2 つの会場の周りでよく会っていました。東京のシーンには、中村としまる、秋山徹次、池田健など優しい先輩たちがいました。また彼女には、Minamo（安永哲郎と杉本佳一）や ASUNA など、私よりも長い友人がいました。2000 年代初頭、私たちは東京の音響シーンを一緒に過ごしましたが、そこは小さくて静かで、時には騒がしかったです。それは世界でも同じだったと思います。特に彼女のもう一つの拠点であるニューヨークでは。私たちはお互いの観客やプレイヤーであることが多かったです。

彼女は体格は小さいですが、とても活動的です。安永哲郎さんと gift_lab さんが松代山の家で開催されたイベントに彼女と招待されたとき、同じ寮に泊まったことを覚えています。その時、彼女は朝起きるとすぐにヨガを始め、このポーズをやってみたらと勧めてくれましたが、私にはまだヨガをするには早すぎると思いました。

彼女が体調を崩していることを知ったのは、2 月に ICC で行われた坂本龍一トリビュートイベントの時に、彼女の音楽が流れていたのに彼女はそこにいなかったからです。連絡しようかと思いましたが、しませんでした。とても後悔しています。彼女の東京の友人たちも私も、彼女が亡くなってから彼女に会っていないので、気持ちの整理がつきません。Minamo と gift_lab が 5 月に彼女のトリビュートイベントを企画するので、その時は気持ちの整理ができると思います。

彼女の音楽はとても繊細で美しいのですが、一方これと矛盾するかのように、交友関係は広くて活動は意志強固でした。彼女が亡くなった今でも、彼女のすべてを知ることはとても難しいと思います。

マルコス・フェルナンデス（東京フォノグラファーズ・ユニオン）

2011 年から 2013 年まで東京フォノグラファーズ・ユニオンの活動的なメンバーとして、sawako さんは数多くのパフォーマンスやワークショップに参加しました。その中には、2012 年に自身がキュレー

ションし、ジェズ・ライリー・フレンチや柳沢英介をゲストに迎えた毎年恒例のワールド・リスニング・デーのイベントも含まれています。sawakoさんは、仕事に対して常に集中し、真剣でありながら、遊び心があり、人を和ませる性格の持ち主でした。私が最後に会ったとき、sawakoさんは、大学で若い女性を教えるという役割を楽しんでいるようでした。

フェリシア・アトキンソン

「sawakoは、詩情にあふれ、寛大な精神を持ったソウルフルなアーティストでした。私が演奏を始めた頃、彼女の音楽の歩みはインスピレーションの源となり、彼女の演奏を聴いて多くのことを学びました。『MADOROMI』は本当に素晴らしいアルバムです。細部や所作へのこだわり、正確で思慮深いところは、今でも心に響きます。彼女は、ウィリアムズバーグにある日本食カフェ、スーパーコアでのブルックリンでの私の最初の個展を、カワイ・ミサキ、ジャスティン・ウォルドロン、そして彼女の友人でミュージシャンのヒコと一緒に企画してくれました。また、2009年の同じ週には、モンキータウンでロビー・リーとコンサートを開催してくれました。彼女のユーモアと優しさ、寛大さ、そして2000年から2010年の初め、実験音楽を演奏する女性たちの間で感じた、とても大切な姉妹のような絆、お互いを思いやる気持ちを覚えています。それは私たちにとって決して楽な時期ではありませんでした。時間が経つのは早いもので、お別れを言う機会を逃してしまったことに悲しみでいっぱいです。Sawakoちゃんがいなくて寂しいです。あなたの音楽はあなたの光を灯し続けるろうそくです。安らかに眠りください。

Kyoka

sawakoさんは私の最も親しい友人の一人であり、素晴らしいアーティストとして常に人々に素晴らしいインスピレーションを与えてくれます。彼女の声は彼女の素晴らしい楽器です。私のトラックの1つ「ybe ybe」(パリからのコレット版)に彼女の声とマイク・ワットのベース音を組み込んだとき、トラックのそれぞれの音が結びつきました。

コーリー・フラー

家族以外にも、私は幸運にも彼女に会い、彼女がどれほど愛されていたか、そして私たちのコミュニティの多くの人々にとってどれほどインスピレーションを与えていたかを伝える機会を得ました。彼女は、完成できなかったいくつかのインスタレーションの作業を完了するのを手伝ってほしいと私に頼んできました。それは私にとって光栄なことであり、彼女のビジョンを実現するお手伝いができたことを願っています。インスタレーションは先日オープンし、老若男女の多様な人々が彼女の作品を楽しんでいるのを見て感動しました。私は彼女の精神を部屋で感じました。